

王室の秘密を握る廷臣たち—『冬物語』における政治的演出とジェイムズ 1 世時代の外交政策の関わりについて—

丹羽佐紀

はじめに

シェイクスピアの『冬物語』(*The Winter's Tale*, 1610) が最初に上演されたのは、記録の上では遅くとも 1611 年、すなわち既にジェイムズ 1 世の時代になって久しく、シェイクスピア自身も大作家としての地位を十分に確立していた頃である。この劇はその後何度か上演されたが、とりわけ 1612 年のクリスマス時期における、ジェイムズ 1 世の王女エリザベスとプファルツ選帝侯フレデリックへの祝婚劇としての上演は、その結婚自体がイングランドにとってプロテスタント同盟強化という政治的意味を持つ大きなイベントであったこともあり、重要なメッセージ性を持っていた。¹ この劇において 3 幕 3 場からボヘミアを舞台に繰り広げられる場面は、Bullough やアーデン版の編者 Pitcher が牧歌的 (pastoral) という表現で示すように、リオンティーズの宮廷を舞台とするシチリアの場面と対照をなすが、海を隔てた二つの王国のつながりは、当時の観客の目に自国イングランドとエリザベス王女が嫁ぐ遠い大陸の異国との結びつきへ大きな期待を抱かせたにちがいない。(Bullough, 121; Pitcher, 48-51)² さらに 16 年の「時」を経て登場人物たちが再会するというあらすじ展開は、三一の法則をいささか無理に引き延ばしたようにも見えるが、王女の結婚により期待されるプロテスタント同盟国の継続性と重ね合わせて観客に捉えられたと解釈することができる。

このように壮大な時空間隔の設定がなされた劇で、主な登場人物たちの奇蹟的再会を実現させるために重要な役割を果たす人物として、本論ではリオンティーズの廷臣の一人であるアンティゴナスと、彼の妻で王妃ハーマイオニーに付き添う女性として仕えるポーリーナに注目する。『冬物語』の材源とされるロバート・グリーン (Robert Greene, 1558-1592) の『パンドスト、時の勝利』(*Pandosto, The Triumph of Time*, 1588. 以下『パンドスト』と表記) には、この二人に相当する人物は登場しない。アンティゴナスとポーリーナはともに、シェイクスピアが創作した登場人物である。しかも『冬物語』において二人は要となる場面でいずれも重要な役割を果たし、結果として劇全体のあらすじに大きく影響を与えているのである。もう一人重要な役割を果たす廷臣としてカミロと言う人物が登場するが、彼は『パンドスト』に登場するフラニオン (Franion) という人物に当たる。カミロは、リオンティーズがなぜ不機嫌なのかを王の友人ポリクシニーズに伝えて一刻も早い出国を促したことで、王の不興を買ってしまうと知り、ポリクシニーズと一緒に国を出る。カミロはこの時、自分の身に危険が及ぶことを恐れて国を逃れるわけだが、劇の最後で最終的には故国シチリアへ帰り、王と喜びの再会を果たす。ではシェイクスピアは、なぜさらにアンティゴナスとポーリーナという人物を付け加え、彼らにそれぞれ王と王妃に仕える役割を担わせたのだろうか。彼らはカミロと何が違うのだろうか。

シチリアの王リオンティーズは、自分の妻が友人ポリクシニーズと不貞を働いていると思いつむ。

彼は生まれたばかりの赤子は自分の子ではないと言い張り、既にポリクシニーズと一緒に国を脱出したカミロではなく、アンティゴナスに対して子供を火にくべるよう命じる。アンティゴナスや周りの貴族たちが躊躇するのを見て取ると、リオンティーズは今度は、赤子を遠い異国の地へ捨てて来いと命じる。結果として3幕3場でボヘミアの海岸に流れ着いたアンティゴナスは、熊に襲われて命を落とすはするが、その直前に水夫を船へ返し、一人で赤子のパーディタをボヘミアの海岸に置く。彼は、父に捨てられた王女パーディタがどこへ捨て置かれたのか、真実を知るただ一人の廷臣となる。一方、王妃ハーマイオニーに仕えるポーリーナは、ハーマイオニーが亡くなったと王に告げてから16年間、伏せられた真実を握り続けるただ一人の人物となる。そして劇の最後の場面で、ずっと秘めてきたその真実を、いつ誰にどのような方法で知らせるのか、一連の奇蹟劇を演出するのも彼女である。アンティゴナスとポーリーナは共に、王リオンティーズが「知り得ない」秘密をその行為において創り出し、まさにその秘密を通して主君への忠誠をこの劇において示しているのである。そしてそれは、カミロや『パンドスト』のフラニオンと明らかに異なる点である。

本論では、ジェームズ1世統治下における廷臣・家臣たちの状況や、彼らを取り巻く出来事との関連において二人の役割を分析する。そして彼らが王に対して持つことになった秘密が、登場人物たちの再会と結婚という大団円の場面、また結果としてシチリアとボヘミア両国の和解という政治的側面に深く関わっていることを明らかにする。

エリザベス1世とジェームズ1世を取り巻く廷臣・家臣たち

エリザベス1世からジェームズ1世の時代に向け、王位継承や外交などをめぐる様々な政治的問題が噴出する中で、王権を支えるべく重要な任務を担った廷臣・家臣たちが存在した。彼らの中には王へ注進する情報にも関与するなど、政策決定の方向性に少なからず影響を与えた人物もいた。任務の重要度が増すことは、それだけ政治的な権限を持つことにつながる。権謀術数渦巻く宮廷において、政治的権限や内政把握の情報収集量の差は廷臣・家臣たちの間に権力争いや軋轢をもたらし、中にはスキャンダルの渦中に置かれたり、失脚する者も少なからずいた。このような話題はしばしばパンフレットを始め様々な形で大衆ゴシップの対象となったが、当時の劇作品においても、王侯貴族に仕える人物はあらずじ展開に良くも悪くも密接に関わり、重要な役割を果たす存在として多く登場する。³ 『ハムレット』のポローニアスや『リア王』のケント伯など、王が登場する劇に廷臣・家臣は付き物と言える。彼らの劇的役割とは、一義的にはあくまでプロットの中におけるその人物自体の特色を観客に印象づけることはもちろんであるが、同時に、上演当時の実際の政治を取り巻く状況を観客に思い起こさせ、実在する廷臣や家臣を登場人物と重ねつつ、忠実な廷臣・家臣の定義や、臣下と主君の関係の在り方への問いを繰り返し投げかける機能も果たしていたのである。

1593年から1594年にかけて、エリザベス1世を暗殺しようとしたかどで、ユダヤ人の医者であったロデリゴ・ロペスが捕えられ処刑された。ロペスの暗殺計画告発に役買った第2代エセックス卿ロバート・デヴァルーは、やがて自分が女王にとってなくてはならぬ存在と思わせるための政略を次々

と練っていく。彼は 1586 年頃から女王の寵愛を受けるようになり、特に 1596 年のカディス遠征で一気に称賛を集めるようになるが、同時に政敵ソールズベリー卿ロバート・セシルと対立を深める。1599 年にアイルランド反乱鎮圧に乗り出すが、失敗に終わり、女王の不興を買う。1601 年には第 3 代サウサンプトン卿ヘンリー・リズリーらとクーデターを起こすが大逆罪となり、処刑される。やがてスチュアート朝ジェームズ 1 世の時代になると、王はセシルをはじめフランシス・ベーコンや国璽尚書トマス・エジャトンなどの助言を取り入れるようになる。Hammer は、エセックス卿を「女王の最後の偉大なる寵臣」(‘her last great favourite’) と表現し、彼の生涯を扱った詳細な分析をしている。(front page) Hammer によれば、エセックス卿は若い頃からかなり政治的野心が強く、女王の信頼も厚いことから周囲の者に早くから「イングランドの将来において重大な任務を担う人物となるであろう」(‘he would play a crucial part in England’s future’) と予期させ、「神の手先」(‘he was an instrument of God’) として選ばれた者という見方さえあったとされる。(139-40) Hammer は、特に 1595 年 11 月 17 日の女王の戴冠記念イベントでは、女王を祝うためと見せかけつつ自分の権力を誇示するための馬上槍試合を開催するなど、エセックス卿が手がけた巧妙な演出方法について説明している。(144-45)⁴ Perry は、そもそも「もし王の宣告が真実で明瞭であれば、臣下はただそれを復唱することで真実に近づくことができる。一方で、王の意図を臣下がはっきり理解出来ないとすると、彼らは自分たちに明かされた単純明白な事実だけに自らの挙動を限定するよう促される」(‘if the king’s declarations are true and plain the subject has access to truth by repeating them; on the other, since subjects cannot fully understand the ways of kings, they are encouraged to limit themselves to the plain truths disclosed to them.’) と述べ、ジェームズ 1 世治下の臣下たちが世辞に長けていた様子を記している。(The Making of Jacobean Culture, 92)

一方、サマセット伯爵ロバート・カーは、ロチェスター卿であった頃からスコットランド王ジェームズ 6 世に仕え、1603 年にジェームズ 6 世がイングランド王ジェームズ 1 世になって以降も王の廷臣として采配を振るった。『冬物語』上演よりは後の話になるが、彼にまつわる事件はやはり特筆すべきであろう。カーは 1612 年には枢密顧問官(Privy Councillor)となり、1613 年にサマセット伯爵に叙されている。(Bellany, 40) 1613 年に第 3 代エセックス伯ロバート・デヴァルー夫人フランセス・ハワードと相思相愛になったが、詩人で友人でもあったトマス・オーヴァーベリーに結婚を反対される。同年 4 月にオーヴァーベリーが不敬罪のかどロンドン塔に投獄されている間、フランセスは彼に毒を盛り殺害したとされる。二人は結婚するが、1615 年からの裁判を経て 1616 年にオーヴァーベリー毒殺容疑で共に逮捕された。この事件は Overbury Affair として大変なスキャンダルとなり、Bellany も指摘するように、ジェームズ 1 世治下の宮廷の腐敗の一端を示す事件として位置づけられるようになる。(7) ちなみに、ジェームズ 1 世が息子である王子ヘンリーのために記した指南書とも言える *Basilikon Doron* (1603) には、絶対に許してはならない罪として「魔術、故意の殺人、(特に身内での) 姦淫、男色、毒盛り、貨幣偽造」(‘Witch-craft, wilfull murder, Incest (especially within the degrees of consanguinitie) Sodomy, Poysoning, and false coine’) が挙げられている。(31) 『ハムレット』のクローディアスによる先王の毒殺や、義理の息子ハムレットへの毒盛りなどにも見られるように、当時の権力争いと絡んで毒はよく用いられる手段であった。

王の廷臣・家臣をめぐるこのような歴史的出来事を背景に、改めて『冬物語』のあらすじ構成に目を向けると、シェイクスピアが、「彼の職権は、これまでもしばしば陛下のご命令同様にあつかわれておりました」(‘By his great authority, / Which often hath no less prevailed than so / On your command’ (2.1.52-54)) と言われながらもいちはやく国外脱出するカミロとは別に、材源の『パンドスト』には出て来ないアンティゴナスとポーリーナという二人の人物を登場させ、2幕3場で二人とも王リオンティーズに口答えをしたかどで直接不興を買う羽目に陥らせていることがわかる。王に逆らえばそれは即、失脚のリスクを意味し、大逆罪で捕えられても不思議ではない。臣下としての立場は致命的で、カミロはそれを察知し、そして回避した。またアンティゴナスとポーリーナは子供を持つ夫婦であり、家族が互いに引き離され二度と会えないようにするリオンティーズの仕打ちはかなり酷い処遇である。王の信用を失うことがどのような結果をもたらすか、二人の立場が明らかになっている。しかし、それでいて後の場面の奇蹟的再会は二人の働きによるものであるといっても過言ではない。言い換えれば、この劇における二つの王国の最終的な和解と、フロリゼルとパーディタの結婚という、未来にわたる継承への啓示は、不遇な目に遭わされた彼らによって導かれたとも言えるのである。

報われないアンティゴナスの忠誠 — 「見えない」所での働き—

材源の『パンドスト』で、赤子を船に乗せて大海へ放ち、それが瞬く間に嵐に翻弄されるのを最後に見届けるのは水夫たち(‘shipmen’)のみである。(Bullough, 167) また、その船が漂着したシチリアの海岸で最初に赤子を見つけるのは、迷った羊を探す最中に泣き声を聞きつけた「貧しい貪欲な」(‘a poor mercenary Sheepheard’) 羊飼いである。(Bullough, 173) シェイクスピアの『冬物語』では、赤子を乗せた船が嵐でボヘミアに漂着するまでのプロセスをアンティゴナスがずっと赤子に付き添う。そして彼は3幕3場で、流れ着いたボヘミアの海岸で熊に襲われ、命を落とすのである。この違いは何を表し、彼が付き添うことにどのような意味があるのだろうか。

漂着場面におけるやりとりを詳細に追うと、アンティゴナスがその直前、海岸を一緒について来た水夫に対し、嵐に備えるため船へ戻るよう促していることがわかる。水夫は船に戻りながら、「やれやれ、ほっとしたよ、いやな仕事をやらずにすんで」(‘I am glad at heart / To be so rid o’th’ business’ (3.3.13-14)) と独りつぶやく。王の命令とはいえその直系子孫であるはずの生まれただけの子供を見知らぬ土地に捨て置く行為が、目下の者にとっていかに精神的苦痛を伴うかをこの水夫は端的に言い表している。『パンドスト』では水夫がこの「いやな仕事」をするが、『冬物語』ではアンティゴナスが、赤子の遺棄を実行する責任を自分一人で負い、パーディタをボヘミアの海岸に置く。ここで彼は、父王リオンティーズに捨てられた王女パーディタが、最終的にどこへ捨て置かれることになったのか、真実を知るただ一人の廷臣となる。もちろん、リオンティーズはそれを知る由もない。

さらに彼は熊に追われるが、パーディタが襲われる危険を回避したという点で、結果的には彼女を救済しているのである。なぜならパーディタがここで死を免れ生き延びることが、後の場面で彼女が結婚へ至る原点となっているからである。ここでアンティゴナスの死は、パーディタが生き残るため

の代償としての意味を持つ。彼は王リオンティーズに「見えない」「知られない」所で務めを果たし、忠実な廷臣として、直接言葉で主君に注進するだけでなく、主君に知られることなく王室が継承されていくための道をつなぎ、いわば殉死する。ただ、アンティゴナスの行為は彼に対して直接報われることはないし、リオンティーズがそれに感謝する台詞も劇の最後まで一度も聞かれない。⁵ このことから、彼が熊に食べられる場面を、一つの巨大な権力に呑みこまれていくことの象徴と捉えることも出来るのではないか。ケンブリッジ版の編者は「廷臣を餌食にする野生の獣は、宮廷を荒らす精神錯乱状態の国王を表す」(‘the wild animal preying on a courtier may further represent the deranged king who had brutalized his court’)として、熊の残酷さとリオンティーズを結びつけるいくつかの論説を紹介している。(32) 4幕4場で、自分は「宮廷人」とであると偽って権威をふりかざす、宮廷人の服を着たオートリカスに、道化は平身低頭になり、父親の羊飼いに次のように「このかたはとつても権力のある人らしいよ、だから頼むことにしなよ、お金をあげて。権力っていうのは頑固な熊だけど、お金を餌にすれば鼻面とつて引きまわすこともできるんだ」と促す。

Clown [aside to Shepherd]: He seems to be of great
 authority. Close with him, give him gold; and, though
 authority be a stubborn bear, yet he is oft led by the
 nose with gold. Show the inside of your purse to the
 outside of his hand, and no more ado. (4.4.805-09)

道化が熊に言及した時、観客の脳裏には3幕3場でアンティゴナスを実際に襲った舞台上の熊をすぐに思い起こせたはずである。リオンティーズの権力はアンティゴナスを呑みこみ、彼を文字通り「見えない」人物にしてしまう。同時に、熊という権力は、身分ある者、すなわちパーディタを回避する。Williamson は、彼が熊に食べられることの意味として、本来ならパーディタの死に立ち合うはずだった彼を身代わりにさせ、パーディタを守り社会的秩序を守る自然の力が働いたとの解釈も示しているが、命を落とす今わの際の夢枕に妻のポーリーナでなくハーマイオニーが立つという設定自体、アンティゴナスの役割においては主君への忠誠が家族より先に立ち、遠い異国の海岸にあってなおシチリア宮廷との結びつきが身体的にも潜在的にも切れないことを示していると言える。(130)⁶

一方で、主君に「見えない」ところで悪巧みを働いたり、権力を握ろうとする人物には、『オセロー』のイアーゴーやマクベスを始め、例えばベン・ジョンソンの『シジェイナスの没落』(*Sejanus His Fall*, c. 1603) など様々な劇に、裏切りや奢りとそのなれの果てが描かれている。Martos は、フィリップ・マッシンジャーの『付添い人』に登場するフルゲンシオを、ジェームズ1世の寵臣であったバッキンガム公を思わせる登場人物として紹介している。(‘Philip Massinger’s *Maid of Honour* (c. 1621) features a secondary character, the corrupt minion Fulgentio, who may well be a characterization of King James I’s favorite, the Duke of Buckingham.’) (9) またベン・ジョンソンの『ヴォルポーネ』(*Volpone*, 1606) に登場する居候のモスカは、身分的には王侯に仕える立場ではないものの、主人のヴォルポーネはもちろん、周り

の人物を皆出し抜こうと巧みに言葉を操るその才能は際立っている。このように、いわゆる家臣の主君に対する忠誠の危機が劇作品において浮き彫りにされる背景には、Perry が「宮廷の腐敗に対するその時代の人々の広がりゆく懸念」(‘the period’s developing concerns about court corruption’) と述べるような状況が現実の世界において絶えずあったからだと言える。(99) Martos は次のようにも述べている。

For instance, *Volpone* (c. 1605), arguably Ben Jonson’s best comedy, presents an acidic parody of early modern English society based on patron-client associations. The turbulent relationship between its protagonists, the master Volpone and his parasite Mosca, may be compared to that of a ruler with his favorite. Indeed, this play is immediately preceded by Jonson’s *Sejanus His Fall* (c. 1603) and the two works have been read together: whereas *Sejanus His Fall* dramatizes the relation between Emperor Tiberius and his minion Sejanus, in *Volpone* that relation is transferred to a lower rank of society. (10)

Rickard によれば、ベン・ジョンソンに比べシェイクスピアは、作品の中で直接エリザベス 1 世崩御への哀悼やジェイムズ 1 世戴冠への賛辞を表すような態度は示していない。(211-12) しかし、特にジェイムズ 1 世治下で、廷臣や家臣の権勢と現実の腐敗とのギャップや、彼らのイメージ低下が顕著になってくる状況下では、当時の劇作品に登場する廷臣・家臣もまた、エンターテインメント的な役回りを演じるだけでなく、忠実な臣下の定義とは何かを観客に問う重要なメッセージ性を持っていると言える。Martos は、当時の廷臣たちの間で繰り広げられていた打算的な地位交渉の実態を、次のように具体的な事例を挙げて説明している。

Seeking their own benefits as Lerma and Buckingham did, it is no surprise that corruption was rampant in the courts dominated by these all-powerful ministers. As an example, the years in which Lerma and Buckingham ruled coincide with an exponential growth of the nobility in both Spain and England, for the two favorites benefited from the distributions of those new titles. The courts of Spain and England at this period were true markets where titles, honors, and offices were continually traded in a business involving patrons and clients from top to bottom. The orchestrators of this business, Lerma and Buckingham, were repeatedly engaged in questionable transactions and were eventually accused of extortion, nepotism, and misappropriation of the royal treasury. (13)

廷臣の腐敗は国の腐敗と比例するとすれば、特にジェイムズ 1 世統治下の外交政策を担う人物の中に、果たしてアンティゴナスのような人物を現実にとれだけ見出せたのかはわからない。それゆえにこそ、材源にはないアンティゴナスの役回りが、二つの王国をめぐる争いと和解のプロセスを軸とする『冬物語』に加えられたことは、重要な意味を持つのである。

ポーリーナの采配 ―奇蹟の仕掛け人―

ポーリーナは 2 幕 3 場で、リオンティーズによって夫のアンティゴナスと引き裂かれ、その娘たちも父親から引き離される。しかし彼女は宮廷で仕え続け、16 年の歳月を経て劇の最後の場面で、リオンティーズをハーマイオニーに巡り合わせる奇蹟の演出を指揮することになる。登場人物たちの「時」を超えての奇蹟的な場面に、他ならぬポーリーナが采配を振ることの劇的意味についてここでは考えてみたい。

例えば彼女がハーマイオニーと結託して、わからずやのリオンティーズを懲らしめる、自分が夫と引き離されたことで、リオンティーズにも同じように妻と会えない状況を与えて仕返しをする、または神託実現のためにハーマイオニーを隠し通すことに使命感を持つなど、の仮説が成り立つ。ポーリーナ自身がその理由を説明する台詞は見受けられず、観客にも 5 幕 3 場までハーマイオニーが生きていることは知らされないため、ここでは様々な解釈が考えられる。だが少なくとも明らかであるのは、彼女は 16 年間、ハーマイオニーと接触していながら、それをリオンティーズに知らせず沈黙を守り通したということである。つまりポーリーナはリオンティーズが知らない事を知っており、しかも自らの内に収めている。それは同時に、ハーマイオニーもこの間、夫のリオンティーズと接触する機会を持たなかったということである。ポーリーナは両方を行き来し、双方の状況を掌握していた。彼女はシチリアの宮廷において誰よりも多くを知る立場にあったという点で、夫のアンティゴナスと同じ役割をこの劇において果たしている。ケンブリッジ版の編者 Snyder と Curren-Aquino も述べるように、ポーリーナは、「ハーマイオニーの復活への責任を負い、リオンティーズより高い認識力を持ち、唯一皆をそこからリードする人物」 ('she is responsible for the restoration of Hermione (5.3.138); she possesses a level of awareness greater than his own (5.3.149-40); and she is the one who will 'lead [all] from hence' (5.3.151-2)') なのである。(57) 同じくケンブリッジ版の編者は次のように「かつてその女の見解を退け、彼女を魔女とか淫売婦と呼んだ男が、今やその手に負えない女の強い力に頼りきり、直近の人々の輪から彼女を失いたくないと願っている」と説明している。

The man who earlier had refused to listen to the woman's view and who had called this particular woman . . . 'mankind witch' and 'Dame Partlet' (2.3.67, 75) has grown dependent on the 'unruly' woman's positive force and is unwilling to lose it from his immediate circle. (57-58)

さらに彼女が沈黙を保ち続けた後に、5 幕 3 場で奇蹟の再会を実現させたことが、結果的に登場人物たちのハッピーエンディングにつながっている。ハーマイオニーとの再会、そして二つの王国をつなぎ、継承させていくことを予感させるフロリゼルとパーディタの結婚は、リオンティーズに改悛と喜びをもたらす。夫のアンティゴナスを失い、その原因を作った他ならぬ張本人であるリオンティーズを恨んで、謀反を起こしても不思議ではない立場にあるはずのポーリーナが、主君よりも多くを知るその権限を生かして最後の大団円をもたらしたとすれば、彼女が 16 年間守り続けた秘密は「誰に

序も守ったのである。その意味において、この劇は上演当時の宮廷腐敗の現実に対するアンチテーゼとしての側面もあったであろう。

*本論は、日本英文学会中四国支部第73回大会（2021年10月23日 Zoom開催）において、「王室の秘密を握る家臣たち—『冬物語』における政治的演出とジェイムズ1世時代の外交政策の関わりについて—」と題して発表した原稿に、改題の上、加筆修正を施したものである。

*本論の『冬物語』原作からの引用は Pitcher 編のアーデン版、日本語訳は小田島雄志訳（白水社）を用いた。

註)

1. 上演当時の祝婚モードとは裏腹に、その後の王女エリザベスとパラタイン選帝侯フレデリックによる対ハプスブルグ家への援助を求める声に、ジェイムズ1世の反応は鈍かった。Pursell は、二人のジェイムズ1世とのやり取りと、その間におけるジェイムズ1世の外交戦略との関係を、主にフレデリックの立場を軸に分析している。(131-63)
2. 'Both in Greene and in Shakespeare the pastoral material is basically orthodox. The child saved from death by exposure and brought up by a herdsman appears in classical drama and story.' (Bullough, 121)
'The pastoral scene in *The Winter's Tale*, 4.4, is one of Shakespeare's major additions to the source, *Pandosto*.' (Pitcher, 50)
Williamson は、『シンベリン』『ペリクリーズ』及び『冬物語』のようなロマンス劇は、非常に政治的な側面を持っており、世継ぎの生まれなかったエリザベス時代には表面化しなかった、家父長制に基づく政治の在り方についての議論が、ジェイムズ1世即位後顕在化したことを指摘している。(111-17)
3. Bellany は、1530年代から1590年代にかけてパンフレットで出回った「宮廷の腐敗」('court corruption' (5)) の話題に加え、ジェイムズ1世時代に manuscript の形で回し読みされた匿名詩人による libel があったことを紹介し、それが明らかにイングランドの宮廷人、そしてジェイムズ1世自身を中傷する内容であったと述べている。('But the poem's court is not safely distant in Italy, and the characters are not fictional foreigners. The court is English; and the characters are powerful Jacobean courtiers and, by implication, James I himself.')(5-6)
4. Hammer は、エセックス卿が女王や側近との関係構築だけでなく、外交政策など様々な場面で、次々と自分の貢献度をアピールしていく様子を詳細に解説している。('Essex sought to convince his audience abroad of two consistent ideas: that he alone in England was truly committed to affairs on the Continent and that he alone would soon hold sway under the queen.')(143) 特に、1595年11月7日に開催された女王の即位記念の催しに、自ら得意とする馬上槍試合を取り入れ、その存在を大いに誇示したとされる。('By this performance [jousting], Essex demonstrated to the queen, and to the public, that he remained her professed favourite.')(145)
5. アンティゴナスが忘れられた存在であることについては、拙論「アンティゴナスの死と忘れられた貞節—『冬物語』におけるもう一組の夫婦について—」(『十七世紀英文学における生と死』十七世紀英文学会編 金星堂、pp. 95-111) を参照されたい。

6. 'If one attempts to subvert these processes, as does Leontes in having Perdita destroyed, nature protects the babe in killing Antigonus, who should preside over her death, and nature also provides the shepherd to care for her until her place in the social order is secure.' (Williamson, 130)

参考文献

- Bellany, Alaster. *The Politics of Court Scandal in Early Modern England: News Culture and the Overbury Affair, 1603-1660*. Cambridge: CUP, 2002.
- Bullough, Geoffrey, ed. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. Vol. VIII. London: Routledge & Kegan Paul, 1975.
- Burke, Peter. *The Fortunes of the Courtier*. Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press, 1995.
- Castiglione, Baldesar. *The Book of the Courtier*. Trans. George Bull. London: Penguin Books, 1967.
- Cousins, A. D., and Alison V. Scott, eds. *Ben Jonson and the Politics of Genre*. Cambridge: CUP, 2009.
- Hammer, Paul E. J. *The Polarisation of Elizabethan Politics: The Political Career of Robert Devereux, 2nd Earl of Essex, 1585-1597*. Cambridge: CUP, 1999.
- James I. King of England. *Basilikon Doron. Or His Maiesties Instructions to His Dearest Sonne, Henry the Prince*. 1603. Rept. Early English Books Online Editions.
- Martos, Francisco Gómez. *Staging Favorites: Theatrical Representations of Political Favoritism in the Early Modern Courts of Spain, France, and England*. London: Routledge, 2021.
- Perry, Curtis. *Literature and Favoritism in Early Modern England*. Cambridge: CUP, 2006.
- *The Making of Jacobean Culture*. Cambridge: CUP, 1997.
- Pursell, Brennan C. *The Winter King: Frederick V of the Palatinate and the Coming of the Thirty Years' War*. London: Routledge, 2003.
- Rickard, Jane. *Writing the Monarch in Jacobean England: Jonson, Donne, Shakespeare and the Works of King James*. Cambridge: CUP, 2015.
- Shakespeare, William. *The Winter's Tale*. Ed. John Pitcher. The Arden Shakespeare. London: Bloomsbury, 2010.
- *The Winter's Tale*. Ed. J. H. P. Pafford. The Arden Shakespeare. London: Routledge, 1966.
- *The Winter's Tale*. Eds. Susan Snyder and Deborah T. Curren-Aquino. The New Cambridge Shakespeare. Cambridge: CUP, 2007.
- Snyder, Susan, and Deborah T. Curren-Aquino. Introduction. *The Winter's Tale* by William Shakespeare. The New Cambridge Shakespeare. Cambridge: CUP, 2007.
- Williamson, Marilyn L. *The Patriarchy of Shakespeare's Comedies*. Detroit: Wayne State University Press, 1986.
- シェイクスピア、ウィリアム『冬物語』小田島雄志訳（白水社、1983年）
- 丹羽佐紀「アンティゴナスの死と忘れられた貞節—『冬物語』におけるもう一組の夫婦について—」（『十七世紀英文学における生と死』十七世紀英文学会編 金星堂）pp. 95-111.